

ドイツ・ヨーロッパ研究室(DESK)
主催シンポジウム

ヨーロッパの安全保障と ニース条約後のEU

European Security and European
Union after Nice

於: 東京大学大学院総合文化研究科・
教養学部 視聴覚ホール(図書館4階)
2001年9月28日(金曜日) 13:30-17:00

EUは2000年12月フランス・ニース
における欧州理事会で、さまざまな制
度改革を盛りこんだニース条約に合意
した。ニース条約は現在批准過程にあ
るが、数年後に予定されているEUの
東方拡大にたいしてEUが効率的に対
応し、多数の加盟国から構成されるよ
うになっても機能不全に陥らないよう
にするために交渉されたものである。
2002年1月からは現金としても共通通
貨ユーロが導入され、ヨーロッパの経済
統合は概ね完成の域に達している。冷
戦後とりわけ旧ユーゴスラビア地域に
おける政治的不安定と紛争の勃発への
対応はEUにとって大きな課題の一つ
となってきたが、EUは近年マスト
リヒト条約によって導入された共通外



交安全保障政策(CFSP)を強化し、
さらに欧州安全保障防衛政策(ESDP)
の構築を急いでいる。その中核に
あるのがいわゆるヘッドラインゴール
といわれるものであり、2003年まで
に紛争に対応できる欧州緊急展開軍
を整備するプロセスが急速に進んでい
る。

本シンポジウムはEUがこのように
近年とりわけ大きな発展をとげてきた
安全保障分野を対象として、山本吉宣
(アメリカ太平洋地域研究センター/国



際社会科学専攻)教授の司会のもと、
9月28日に視聴覚ホールで開催された。

発表者として、イギリス
のEU政策、EUの外交
安全保障防衛問題など
の分野で気鋭の研究者
であるアンソニー・フ
ォスター(Anthony
FORSTER)統合指揮
幕僚大学防衛研究学科
研究主任がイギリスか
ら参加し、ドイツから
はNATOをはじめと
してヨーロッパの安全
保障問題で著名なライ
ムント・ザイデルマン
(Reimund SEIDEL-
MANN)ギーセン大学
教授が参加した。日本
からはヨーロッパの政
治・安全保障問題の第
一人者である植田隆子



国際基督教大学教養学部教授が発表者として参加し、ディスカッサントとして吉崎知典防衛研究所主任研究官と鈴木一人筑波大学国際総合学類講師の2名の気鋭ヨーロッパ政治・安全保障分野の専門家が参加した。

最初に"European Union Defence: Turning Theory into Reality"というテーマで講演をおこなったフォスター氏は、イギリスの視点からEUの安全保障・防衛政策の発展を分析した。イギリスがアメリカとの関係を優先するためにNATOのみを安全保障・防衛政策の柱とする従来の立場から、EUの安全保障・防衛政策の構築を認めるようになったのかについて、冷戦後のボスニアやコソボでの経験からアメリカとの軍事力行使をめぐる考え方の違いが明らかになったこと、ヨーロッパの軍事力がその財政支出とは不釣り合いに非効率であること、冷戦後のイギリスの軍事戦略の再検討などをあげて説明した。またイギリスはなおNATOを重視し、EUの軍事面を整備することによってNATOを強化することを望んでいるが、同時にアメリカがヨーロッパへのコミットメントを弱めてしまったりする危険性があることなどを指摘した。今後の展望として、イギリスがEUによる軍事行動が必要と考えるケースはNATOが全体として行動できないときのみであるが、この



考え方は必ずしも他の構成国には共有されていないこと、軍備・設備の問題などから構成国の困難な財政状況の下では共通安全保障・防衛政策の現実化にあたってはさまざまな問題が考えられることなどが論じられた。

次に"Problems and Perspectives of Common Foreign Security Policy (CFSP) and European Security and Defense Policy (ESDP) from German View"というテーマで講演したザイデルマン氏は、基本的な部分でフォスター氏の分析に同意するという前提のもとで、あえてイギリスとドイツの安全保障・防衛政策をめぐる考え方の違いを強調しながら議論を進めた。イギリスがきわめてプラグマティックな政策をとるのにたいして、ドイツには長

期的な視点と思考論理を重視する傾向があり、このことがドイツのEU政策、共通安全保障・防衛政策にも影響を与えていることが指摘された。ドイツはEUの共通安全保障・防衛政策の構築をより大きな政治的プロジェクトという視点から見ており、さらにヨーロッパ統合を進めるという大きな全体の中の一つとして共通安全保障・防衛政策が位置づけられていること、そして長期的にはヨーロッパがアメリカと対等なパートナーになることによって大西洋協力枠組みの再検討の可能性を開くものになること、経済力を保管する軍事能力の構築によりEUがグローバルプレーヤーに発展する可能性をもたらすものであることが述べられた。今後の展望としては、EUのヘッドラインゴールの達成には財政問題をはじめとして様々な困難があること、その中で軍事産業の再編などもコスト削減のために行われなければならないこと、最終的には国家主権につよく関わる軍事・安全保障という分野を欧州統合のプロセスに組み込んでいくためには政治的な意志がさらに醸成されなければならないことなどが指摘された。

最後に"The Evolution of European Security and Defence Policy as Viewed from Japan"というテーマで講演した植田氏は、9月11日のアメリカにおける同時多発テロ以後の安全保障環境の変化を念頭に置きつつ、EUの安全保障・防衛政策の展開について日本からの視点を取り入れながら、日本がEUとの関係をどのように構築していけるかなど、様々な角度から論じた。

ディスカッサントとして吉崎氏は、共通安全保障・防衛政策という目的とこれを実現するための手段、とりわけ



財政との関係、英米特殊関係とこの分野の関わりなどの問題を提起し、鈴木氏は氏が専門とするヨーロッパの宇宙政策における協力との関わりから問題を提起した。

このシンポジウムには、非常に専門的な内容にもかかわらず、また同時通訳はあったものの、基本的に議論が英語で行われたにもかかわらず、約100にもおよぶ聴衆が参加し、聴衆の中には多くのヨーロッパ研究者の顔が見られた。聴衆からは大変多くの質問が発表者に出されたが、会場の都合で十分な質疑応答の時間がとれなかったことが残念に思えるほど、熱のこもったシンポジウムとなった。

なおフォスター氏とザイデルマン氏の講演内容の詳細については、DESKからまもなく発行される『ヨーロッパ研究』第1号に掲載される論文をご参照いただきたい。

森井裕一（地域文化研究専攻）



「シェーンベルク没後 50周年記念 浄められた夜」

2001年6月20日

於 東京芸術劇場小ホール

2001年は、ウィーン生まれの作曲家、アルノルト・シェーンベルク（1874-1951）の没後50年にあたり、オーストリア本国はもとより、彼が芸術アカデミーの教授職を得たベルリンをはじめとするドイツの諸都市、そして亡命先であるアメリカ合衆国などで、数多くの記念の催しが行われた。日本でも、7月の命日をはさんで、明治学院大学においてこの作曲家にまつわる巡回展とシンポジウムが開催されていたが、DESK主催の企画として催された「シェーンベルク没後50周年記念 浄められた夜」は、それに先立ち、シェーンベルクの初期作品である弦楽六重奏のための《浄められた夜》の、ピアノ三重奏版（弟子のエドゥアルト・シュトイエルマンによる編曲）の演奏（御室美佐子、野田枝里、石川祐治）とモダン・ダンス（山崎広太、平山素子）とのコラボレーションのなかに、作品の新たな可能性を見出そうとし、その意図や成果を小さなシンポジウム（石井達郎、石田一志、長木誠司）で音楽とダンス双方から紹介し検証しようという試みであった。

シェーンベルクは、モーツァルトやベートーヴェン、ブラームスが活躍した音楽の都ウィーンのユダヤの家系に生まれ、この町の伝統を継承しながらそれを20世紀という新しい時代の中であるべき姿へと発展させた。彼はドイツ/オーストリア音楽の長い歴史の中で、自分がどこに位置すべきなのかということを常に意識しており、革新的な音楽を作曲するときにも、必ずそれが偉大な伝統と何らかのつながりを持っているということを主張してやまなかった。弟子のアルバン・ベルクやアントン・ウェーベルンとともに新ウィーン楽派を構成する彼は、無調音楽や、そのシステム化された方法である十二音技法といった斬新な音楽で20世紀のその後の前衛運動の先駆けとなったが、その彼がまず模範とし、継承すべき当の作曲家と考えたのは、ベートーヴェンやブラームス、そしてヴァーグナーでありマーラーであった。ほとんど独学ではあったが、彼らの創

作をつぶさに検討しながら、シェーンベルクは本格的な作曲活動に踏み込んだのである。その創作過程は、西欧モダニズム芸術音楽の主軸のひとつとなっており、20世紀前半の大きな潮流を形作ったわけであるから、シェーンベルクについて考察することは、単にドイツ語圏を越えて、広くヨーロッパ全体の問題へと直結するわけであり、またナチ時代のアメリカへの亡命を考えれば、新大陸にとっての文化的先進地域ないしは異文化圏としてのヨーロッパというまなざしも含み持つことになる。

そうしたシェーンベルクの最初の大きな成果こそ、25歳のときに書いた弦楽六重奏曲《浄夜》（1899）であった。この作品は、ロマン派の残り火に照らされながら、世紀転換期の思潮とも言える人生への諦観と、新しい価値に向かって、もう一度それを肯定する大いなる決意を秘めた世界を展開している。詩人リヒャルト・デーメル（1863-1920）の書いた詩集『女と世界』（1896年刊行）の冒頭を飾る「浄夜」という詩に感銘を受けたシェーンベルクは、その詩の内容を追うような形の標題音楽としてこの作品を作曲したわけであるが、「まだ乾かない《トリスタン》のスコアをさっと拭ってぼかしたような」という当時の否定的な評は、作品の本質的な部分に触れていよう。というのも、この評はこの作品が多くを依っているヴァーグナーの和声的手法を言い当てているからである。もちろん、その手法はさらに大胆に展開されているわけであるが、世紀末、弱冠25歳にして、すでに19世紀音楽の到達点をすべて手中にしていた作曲家の姿、すなわちそれによってこそはじめて20世紀という時代の音楽に踏み出しうるあらゆる条件が、そこに読みとれることになる。

デーメルの詩の大意は次のようなものである。「月の光が降り注ぐなか、冬の林を男女ふたりが歩んでいる。女が語り始める。自分は今身籠もっているが、それは母となる喜びのために見も知らぬ男に身を委ねたゆえである。自分は一時それを祝福したが、今、本当に愛するひとを前にして、その復讐を受けることになった、と。たゆたう光の中、今度は男が語り始める。その子供を自分の子として生んでほしい、と。月明かりの夜空を、ふたりは抱き

合い、静かに歩いてゆく。ふたりの愛は浄められた。」

この作品は、まだシェーンベルクが無調や十二音技法に移行するずっと以前ののものであり、様式としては後期ロマン派の標題音楽に属している。ヴァーグナーやマーラー、あるいはR.シュトラウスを聴き慣れた人間には、ごく自然に入ってゆける音楽と言えよう。その意味では、ナラティブな振り付けを施す恰好の題材であり、実際、アメリカにこの作品が知られるようになったのは、アントニー・テューダーによる振り付け上演がひとつのきっかけになっている。しかしながら、今回出演していただいた山崎広太と平山素子両ダンサーは、むしろそうしたナラティブなもの解体、身体動作の擁する物語的な仕草の解体の上に自らのパフォーマンスを位置づけてきた。それゆえ、こうした標題音楽との出逢いはひとつの冒険であると同時に、そのミスマッチぶりが、音楽だけでは発し得ない新たな意味作用を生み出す可能性があった。

結果的に山崎氏の振り付けは、例えば、作品中央に聞こえる安定した三和音による浄化の暗示といった標題とは無関係のところまで一対の男女の交感を描き出しており、それは浄められ、許され、癒されるといったなんらかの到達点を持たない、いわば安寧なく続き、終わることのない両者の葛藤をモチーフにしていたように思われる。もっとも、振り付けの意味論的分析は急急に行われるべきではなく、検証のためのいろいろな道具立てを周到に用意すべきことが小シンポジウムを行ったあとの感想であるが、今回の主旨はむしろ、19世紀後半のシリアス音楽を席卷していた標題音楽の換骨奪胎の可能性を探る点にあったわけで、その意味での示唆は大いにあったと思う。

なお、この上演に先立って、シェーンベルクの無調時代の作品である《6つのピアノ小品》作品19と、アメリカ亡命時代のものではあるが十二音技法による《幻想曲》作品47が演奏され、《浄められた夜》と併せると、調性時代、無調時代、十二音技法時代という3つの時代の様式がバランスよく配置されたことを付記しておく。

長木誠司（超域文化科学専攻）

2001年度夏学期 DESKチュートリアルについて

2001年度夏学期、DESKチュートリアルでは、欧州連合EUの東方拡大をテーマに、外交官・大使館員による講演会を開催した。初回に、欧州統合を牽引するドイツとフランスの外交官を招待し、欧州統合理念とEU拡大コンセプトについて議論を行い、その後3回に渡り、旧東欧諸国（スロヴェニア、クロアチア、ハンガリー）からゲストを招いて、各国のEU加盟に向けての動向を伺った。以下では、これらの講演会について簡単に述べたいと思う。

< 独仏外交官講演会 (2001年5月15日)>

2001年度夏学期のチュートリアルは、「EU東方拡大」を中心テーマに外交官講演会を開催した。第1回目の講

演会は、ドイツ大使館からC. ハリーヤ氏、フランス大使館からJ-F. カザボンヌ=マゾナーヴ氏を招待し、「EU拡大 ドイツ、フランスの視点から」をテーマに行った。

講演では、まずハリーヤ氏が、第二次世界大戦後の欧州統合プロセスと、現在進行しているEU拡大について詳説した。戦争への反省と経済復興を共通目標に、フランス・ドイツ・イタリア・ベネルクス三国の6カ国をコアメンバーとして始まったECがEUへと発展し、加盟国も15カ国にまで拡大した背景や、東欧諸国を中心にEU加盟交渉が進んでいる現状について触れた。ハリーヤ氏は、バルカン紛争を例にあげて、EU拡大の背景には、欧州全体の「平和と安定」があると語った。しかしその一方で、6カ国でスタートした組織が、現在15カ国に拡大し、今後30カ国近くにも膨れ上がれば、制度改革が大きな課題であるという見解を示した。



独仏外交官講演会
J-F.カザボンヌ=マゾナーヴ氏(左から二人目) C.ハリーヤ氏(右から二人目)



参加者の様子

続いてカザボンヌ＝マゾナーヴ氏が、欧州統合プロセスに関するフランス側の見解を述べた。1954年、ヨーロッパ防衛共同体構想がフランスの拒否によって実現されなかった例が示すように、当初から欧州統合プロセスは、安全保障を中心とする政治レベルでは機能せず、経済中心に進展したと述べた。しかし、バルカン紛争により、EU共通外交の重要性が増すとともに、ユーロ導入にともない政治レベルでの統合も不可欠となった。それとともに、冷戦終結により民主化された東欧諸国へのEU拡大も重要課題となる。EU拡大は、各国・各地域の文化的多様性は保持するもので、共通言語の設定のような、一つの文化への統合を目指すものではない、とカザボンヌ＝マゾナーヴ氏は説明した。

学生からは、EU拡大に伴う東欧からの労働力流入問題、ユーロの不振などについての質問があった。これに対して、両氏は、80年代のEC南方拡大が成功した点について触れ、市民に対する教育と説明を通して拡大に対する心理的不安を取り除くとともに、消費者の増大や市場の拡大などのプラス面にも着目する必要があると主張した。

<スロヴェニア外交官講演会 (2001年5月29日)>

EU東方拡大に関する第2回目の講演会は、スロヴェニア大使館からM. ヴォデブ氏を招待し、「欧州統合とスロヴェニア」をテーマに開催した。ヴォデブ氏はビデオを用いてスロヴェニアを紹介した後、スロヴェニアの対EU政策を解説した。ヴォデブ氏によれば、スロヴェニアは1999年に欧州委員会との交渉を開始し、現在までに加盟条件の多くをクリアーしている。一方、問題点としては、脱国有化の遅延、行政改革の遅延、銀行改革の遅延などがあげられた。

次に、EU拡大の争点である、労働力の西側への流入について触れ、ドイツやオーストリアが、労働力の自由移動開始までに移行期間を設けて労働力流入を抑える方針を打ち出しているのに対して、スロヴェニアは移住するメンタリティーを持たず、こうした問題に該当していないと語った。

ヴォデブ氏はさらに、スロヴェニア



スロヴェニア外交官講演会 (M.ヴォデブ氏) 夕食会の様子



クロアチア外交官講演会 (D.リュバノヴィッチ氏)

のEU加盟は2004年または2005年と見るのが現実的であること、スロヴェニアがアメリカの支持のもとNATO加盟に向けても努力していること、EU加盟後もユーロにはすぐには参加しないことについて触れた。

学生からは、EU加盟に反対するスロヴェニア国内勢力について質問があった。

これに対して、ヴォデブ氏は、EU加盟によって主権の一部や文化的アイデンティティが失われると恐れる人々や、EUがスロヴェニアをフェアーに扱っていないと批判する人々が存在すると述べた。

スロヴェニアと旧ユーゴスラヴィア諸国との関係についての質問には、まずユーゴスラヴィア連邦での政権交代とともに、両国間で外交関係が結ばれた背景について触れ、クロアチアとの関係は、領海線や原子力発電所の所有権などに関する論争はあるが、全体的に良好であると説明した。また、アイデンティティに関する質問に対しては、ユーゴ時代もスロヴェニア人というアイデ

ンティティがユーゴスラヴィア人に優先していたこと、連邦へのスロヴェニアの財政的負担が大きかったことが独立への要求を招いたことについて語った。

<クロアチア外交官講演会 (2001年6月5日)>

EU東方拡大シリーズの第3回講演会は、クロアチア大使館書記官のD. リュバノヴィッチ氏を招いて、「現代クロアチア事情」をテーマに開催した。講演は、地図や写真、ビデオなど多くの資料を用いて、クロアチアの地理・文化・歴史から、現代の政治・経済情勢、さらに当面の政治的目標であるEU加盟に向けての準備に至るまで、詳しく解説したものだ。

クロアチア紹介の後、リュバノヴィッチ氏はまず、ユーゴ時代から内戦、そして1991年の独立に至るまでのプロセスを解説した。次に、講演テーマはクロアチアの今日における政治情勢に移った。リュバノヴィッチ氏によると、2000年の総選挙の後に成立した新政権

は、EU加盟を主要政治目標に掲げ、欧州統合省を設けるなど、ヨーロッパ寄りの政策を展開している。EUとの交渉プロセスも進展し、2000年11月には当時のEU議長国フランスと共同でザグレブ・サミットを開催し成功を収めた。リュパノヴィッチ氏は、3年後あたりにEU加盟交渉が正式にスタートするであろうと語った。

リュパノヴィッチ氏はさらに、クロアチアの経済・社会問題を取り上げ、内戦以来深刻化する難民・失業問題について解説した。その一方で、90年代半ばから民営化が着々と進み、基幹産業である観光事業の再活性化に成功している点や、ドイツ・オーストリアの外資系銀行が増えている点についても説明した。

学生との議論では、例えば、クロアチアにおける民族紛争後の痕跡や、第二次世界大戦中の歴史的記憶、さらにロシアとの政治的関係がテーマとしてあがった。リュパノヴィッチ氏は、紛争がもたらした難民の帰還が、ユーゴ軍連邦軍の残した地雷や、荒廃した現地の経済状況により、困難である現状について述べるとともに、歴史的記憶が悲惨な民族紛争に影響を与えたこと、さらに、さまざま周辺大国に支配されてきた歴史がクロアチア独立に強く作用した点についても触れた。

<ハンガリー大使館員講演会 (2001年6月19日)>

EU拡大をテーマとする第4回目の講演会は、ハンガリー大使館員の柳澤＝ホルヴァート・ジュンジ氏を迎えて、「EU拡大とハンガリー」をテーマに開催した。柳澤＝ホルヴァート氏は、まずハンガリー紹介のビデオをもとに、ハンガリー文化・社会について概説した。それによると、ハンガリーは、自然科学、特に数学に強く、日本と同様に高齢者問題や自殺といった社会問題を抱えている。ハンガリー人は、冷戦下の東側ブロックを示す「東欧」よりも「中欧」としてのアイデンティティを持ち、EU加盟も「ヨーロッパへの回帰」として捉えている。また、ハンガリーのルーツは中央アジアにあり、姓が先にくる名前の順番や、助詞が名詞の後にくる語順などにその証拠が見られる、と柳澤＝ホルヴァート氏



ハンガリー大使館員講演会 (柳澤＝ホルヴァート・ジュンジ氏)

は説明した。

その後、講演は参加者からの質問を中心に進行していった。現在のブダペストの生活水準に関する質問に対して、柳澤＝ホルヴァート氏は、医療保険や年金などの福祉制度が充実していた社会主義時代と比べて、一般市民の日常生活状況が悪化し、それに対する不満が高まっていると語った。また、EU加盟のデメリットに関する質問に対しては、加盟準備のためのコスト、ブレインの国外流出などがあげられた。

EU加盟後のハンガリー経済に関する質問に対しては、これまで、農業から自動車産業・通信産業へと重点が移った点をあげるとともに、今後はコンピュータ等の技術開発や観光産業等、ハンガリー独特のものを売り込む必要が強まるだろうと語った。柳澤＝ホルヴァート氏は最後に、ハンガリーにおける社会問題について触れ、ハンガリー東部・西部間での経済格差、環境問題、ロマ人をはじめとする少数民族問題、トランシルヴァニア地方のハンガリー系少数民族問題について解説した。

以上のように、2001年夏学期のチュートリアルでは、欧州各国の外交官・大使館員を招待して、EU東方拡大に関する講演会を開催し、そこでは学生

との活発な議論が展開された。2001年度冬学期のチュートリアルでも、EU拡大とユーロを中心テーマに取り上げ、スウェーデン、フランス、イギリス、ベルギー、トルコの駐日大使館・領事館からゲストを招いて、引き続き外交官講演会を開催した(詳細については次号に記述する)。こうした催しを通して、学生のヨーロッパ研究に対する関心を一層高めていくことに貢献できたら幸いである。

井関正久 (DESK)



DESKヨーロッパ
社会科学部門研究コロキウム

このコロキウムは、研究者間の共同研究に刺激を与え、同時に次の世代を担う大学院学生にヨーロッパ研究の最先端の状況に触れさせることを目的としています。

内容は専門的なものですが、どなたでも参加いただけます。

2001年4月から12月には次のような参加者とテーマでコロキウムが開催されました。

第7回 2001年5月25日(金曜日)

14:30-16:00

8号館3階306号室

児玉 昌己氏

(長崎純心大学 人文学部 教授)

「サンテール欧州委員会の

総辞職とEUの憲法政治」

第8回 2001年6月25日(月曜日)

16:20-18:00

8号館3階306号室

栗栖 薫子氏

(神戸大学 国際文化学部 助教授)

「バルカン地域における

紛争予防活動について」

第9回 2001年9月27日(木曜日)

10:30-12:00

8号館3階306号室

R.ザイデルマン氏

(Reimund Seidelmann,

ギーゼン大学 ドイツ 教授)

「Germany and the ESDP」

第10回

2001年9月27日(木曜日)

14:00-15:30

8号館3階306号室

A.フォースター氏

(Anthony Forster,

統合指揮幕僚大学 イギリス

防衛研究学科 研究主任)

「Britain and the European Union」

第11回

2001年11月30日(金曜日)

14:40-16:10

8号館3階306号室

岩間 陽子氏

(政策研究大学院大学 助教授)

「冷戦後の

ドイツ安全保障政策の変遷」

第12回

2001年12月12日(水曜日)

16:20-18:00

8号館3階306号室

戸蒔 仁司氏

(北九州市立大学 法学部 講師)

「共通外交安全保障政策(CFSP)の

分析手法をめぐる研究動向に

ついて」

長崎純心大学の児玉昌己先生より、このコロキウムでの報告要旨をいただきました。(P.8でご紹介します)



第9回

R.ザイデルマン氏

(Reimund Seidelmann,ギーゼン大学 ドイツ 教授)

「Germany and the ESDP」



第10回

A.フォースター氏

(Anthony Forster, 統合指揮幕僚大学 イギリス 防衛研究学科 研究主任)

「Britain and the European Union」



サンテール欧州委員会の総辞職 とEUの憲法政治

--- 欧州議会の対応を中心として ---

1999年3月European Unionにあっては、欧州委員会の総辞職というきわめて深刻な政治危機を迎えた。その余震は1年を経過した現在でもEUを揺るがせている。いやこの危機はEUの政治構造に多大なインパクトを今後も与えつづけると思われる。

欧州委員会が直面した政治危機とは、1998年12月に行われた1996年EU予算の執行解除に関する欧州議会の反対決議に始まり、それを受けた99年1月の欧州委員会に対する非難動議の上程と否決、後述する独立委員会の調査報告書の3月15日の公表、そこでの前仏首相経験者エディット・クレソン、マニユエル・マリノ副委員長らの人事および予算行政における灰色疑惑の指摘、その結果として翌日のサンテール欧州委員長および19名の委員全員の総辞職発表というものである。これは、まさにEUの牽引車として欧州委員会の前身である欧州石炭鉄鋼共同体の「最高機関」が発足して以降、50年余にわたりEUの行政府がそれまで経験してきたことのない危機である。

欧州委員会の総辞職については、我が国でも、あるいは現地欧州においても、幾多の報道がなされているにもかかわらず、必ずしもその意味が十分理解されているとは思われない。1999年の7月段階で、マスコミは同年4月に欧州理事会で加盟国首脳の合意により、浮上した欧州委員長就任予定者プロデ



ィに焦点を当て、あたかもプロディ委員会が既に機能しているかのように報道していた事実にはそれは見られる。

欧州議会のもつ欧州委員会の承認権限への無理解や、技術的な理解の問題は別にしても、この欧州委員会の総辞職がもつEUの憲法政治上における意義については、現地においてもあまり理解されていない節がある。例えば、イギリスのブレア首相は、サンテールの欧州委員会にたいし、後述する独立専門委員会の調査報告が出て、総辞職するとの報道に接し、その日のうちに、責任のとり方については、「サンテールが交代すれば良い」だけで、イギリス出身の欧州委員については、まったく交代させる必要がないと直ちに反応したことも見られる。つまりこの事件は、フランスの政治家、クレソンらの情実政治に起因する、一部委員のスキャンダルに過ぎないという表相的なレベルでしか捉えられていず、この事件が、例えば、欧州委員会の「一体性」(collegiality)や委員長と他の委員の権限関係というEUの憲法政治にかかわる問題を鋭く提起していることにほとんど意を置いていなかったといえる。



欧州委員会の総辞職は、1952年の欧州石炭鉄鋼共同体を以って始まる欧州統合史上初めての出来事であり、その意味は、後述するように、EUの憲法上の意味を持つものである。欧州の当事者にあっても、我が国にあってはとりわけそうであるが、総辞職がEUの憲法政治に関わる重大問題であるとの認識が希薄なのは、欧州委員会の権限それ自体と、EUの権限と活動の実際について、理解がまず十分になされていない事からくる。更には、事態の理解を困難にしたのは、EUの機関と権限についての認識が十分でないことに加え、EUの拡大を目前とし、かつ欧州委員会の総辞職という未曾有の事態の渦中の5月にアムステルダム条約が発効し、欧州議会による欧州委員会の承認権限が変更され、しかもその直後の6月に欧州議会の議員選挙が行われたということにもよる。

本報告では、1年を経て、ようやく若干の研究論文が出始めた欧州委員会に対する非難動議や欧州委員会総辞職に関する問題について、それらも参考にしながら、欧州委員会の総辞職を招くにいたった政治状況を概観し、EUの憲法政治に及ぼす欧州委員会総辞職の意味を探ってみることを目的とした。同時に、これは近時深刻化してきた政治体としてのEUの、特に「民主主義の赤字」として表現される民主主義と、正当性の問題ときわめて密接な関連を持ち、行政府たる欧州委員会の欧州議会や閣僚理事会への「説明責任(accountability)のあり方や、欧州議会の欧州委員会に対する監督権限の分析、そしてEU政治全般の方向性と、それが抱える問題の分析に通じる意味を持つ。

結論としていえば、欧州委員会の総辞職は、1952年の欧州石炭鉄鋼共同体の創設以降、史上初のまさに異例の出来事だった。この事件は、欧州大陸の比較的歴史的体験を同じくする6カ国が形成してきた政治体としてのECが、内部的には、統合組織としての実質を十分深め、外部的には、冷戦の終焉、とりわけソ連と東欧の衛星国の崩壊という周辺環境の劇的変化も伴い、明らかに原加盟6カ国とは様々な意味で異質な国家群をその構成メンバーとして抱える可能性を高めていく過程で、EUとEU加盟国が歴史上、初めて経験した深刻な政治的危機といえることができる。

この事件は、EUが市民に近いEUを規律しながらも、実態として、加盟国と市民から遠い存在になりつつあるということが背景にあり、欧州レベルでの肥大化した官僚制の実態を暴く格好のマスコミの材料となり、かつその餌食としても利用された。しかし、そうしたレベルでの評価だけで済まされてはならない。

欧州委員会の総辞職に見られるEUの危機は、表面的には、1999年3月15-16日の欧州委員会の総辞職と、その修復過程として、99年9月15日の欧州議会の承認によるプロディ新委員会の成立と、その下での新たな政治的対応の開始という過程を通して、収まっていく。しかし、この危機は、EUの中での日々多数起きている単なる政治的な利害の衝突ではなく、欧州統合組織としてのEUが初めて抱えた深刻な憲法上の危機と、その危機の過程でEUの機関間の権限関係における欧州議会の実質的な権限強化に作用する性格を持っていた。つまり、総辞職で傷ついた欧州議会と欧州委員会の信頼関係と、EU自体の正当性の修復過程は、欧州統合として進化してきた20世紀後半から50年を経て、21世紀を目前にした新しい欧州の政治秩序、つまり欧州統合の進むべき中身がどのようなものであるべきかという欧州統合のあり方にかかわる本質的な政治問題をクローズアップした。

欧州委員会は、これまで欧州統合の推進者として、EUの発展に大きな役割を果たして来た。しかし、経済通貨同盟を完成させ、政治同盟という外交安保、軍事まで含めた政治統合まで展望するに至ったEUにおいて、すでに欧州委員会の権限と政策の対象領域は、欧州の経済社会政策をほぼ全てをカバーするまでに広がっている。EUは外交安保軍事領域まで徐々にその権限をとり込み始めているが、この総辞職事件は、選挙で選出されていない欧州委員会が、はたして、加盟国の主権の権限の管轄の最後の領域にまで踏み込む権限を行使できるのか、その正当性はあるのか、ないのか。あるとすれば、一体いかなる意味においてか、という理論的、実践的問題を提起する新たな契機となったといえる。

今後、機関間の権限関係、具体的に言えば、欧州委員会のあり方と、欧州



議会と欧州委員会の役割にたいする欧州の政治指導者たちの対応をより明確に迫る作用を内包しているといえる。言い換えれば、欧州委員会の権限と役割と、欧州議会による欧州委員会の監督権限の行使のあり方に関する再定義の必要性ということである。すでに欧州委員会の内部改革に関する白書が発表され、改革の具体的実施のスケジュールも明らかにされているが、それに止まらず、今後のEUにおける欧州委員会の位置付けという問題も検討されていくものと思われる。欧州の市民から直接選出されていない欧州委員会がいかなる正当性を持って、加盟国と産業界にたいし、第2章に述べたケースが示すように、何万もの地域の雇用に影響をおよぼす補助金の停止を命じ、あるいは熾烈な企業間競争を生き抜くための企業合併を審査できるかということである。欧州委員会の権限がかくも大きなものである限り、欧州委員会の行為の正当性の問題は絶えず、加盟国の産業界、あるいは市民レベルで問われ続けていくであろう。

欧州委員会と欧州議会との関係におけるこの総辞職事件の意義について整理するならば、直接的には総辞職とは別に、EUの新たな拡大を前に、制度改革は着実に進められつつあるが、これを契機に欧州委員会の改革がいつそう促進されること、そして、欧州委員会の改革に直結する議論のみならず、欧州議会による欧州委員会への民主的監督の仕方、つまり欧州議会の政治的構成（すなわちイデオロギー的政党構成）を直接的に欧州委員会の構成に反

映させる議院内閣制的な方向性と、それを可能にする制度改変に向けた議論をさらにEU内部に喚起していく可能性がある。

他方、加盟国がこれ以上の主権移譲をEUに認めるか否かという問題に直面している中で、欧州政党レベルでも、欧州委員会への非難動議への投票行動で見たように、内部のコンセンサスが徐々に失われる予兆が示されている。欧州議会が、欧州委員会に対する優越的地位を占め始めるにつれ、また欧州社会党、欧州人民党の2大政党が協力して、欧州委員会を支え欧州統合を進めるといふこれまでの図式が崩れ、しかも閣僚理事会とともに共同決定権者として立法府としての地位を確たるものにしつつある欧州議会自身において、党派性の問題が顕在化することにより、EU政治の行方が混迷を深める可能性もある。

最後に、サンテール委員会の総辞職を欧州統合との関連で総括すれば、様々な制度上の矛盾を内包しながらも、資本と労働のほぼ全ての勢力の支援を背景に推進された、ドロールの「1992年の市場統合」にみられたあの幸福で華麗な欧州統合の時代が、名実ともに終焉の時を迎えたことを意味する事件であったと結論づけることができよう。

なお、この報告は「サンテール欧州委員会の総辞職とEUの憲法政治」同志社大学ワールドワイドビジネス・レビュー第1巻第1号1 35頁2000年として発刊された。

児玉昌己(長崎純心大学人文学部教授)

助成金成果報告 フランスにおける資料収集

大統領選挙と国民議会選挙を目前に、フランスは“政治の季節”を迎えている。目下の下馬評では保守RPRのシラク大統領と左派政権率いるジョスパン首相の現職がほぼ互角の支持率といったところ。しかしシラクはあまり頭回りが速くないし、何よりもゴースムの継承者を自認しながら、将軍のような威厳に欠けている。ジョスパンはクセがないが、有能なテクノクラートという以上の印象を持たず、何れにせよ、一言でいってしまえば御両人は私にとって“面白み”に欠けるのである。

「大国」フランスの新世紀初めての大統領、もう少し魅力的な候補者はいないものか。そこで、注目したいのが保守・左派双方の票田を食い荒らす可能性があるといわれているシュヴェンヌマン候補である。何を隠そう、このシュヴェンヌマンという前大臣、私が修士論文で対象とするフランス社会党の旧派閥C.E.R.E.Sのリーダーであり、訪問先のひとつとして予定していた政党MDC（市民運動）の党首でもある。彼の立候補を知り、さすが私の注目した人物だけある（！）と、一人贅に入る。アルジェリア戦争を戦い、かつてマルクスやレーニンも属したことのあるSFIO（労働者インターナショナルフランス支部）パリ第14セクションのホープ。若くして社会党幹部に取り入

り、イデオロギー派閥左派C.E.R.E.Sを率いつつも、その後ミッテランの権謀術数にしてやられてしまった人間。「閣僚とは口を閉じているか、そうでなければ辞任すべき」という自らのモットーに従って3回も閣僚を辞任し、マーストリヒト条約批准を機として共和主義に依拠する新党を結成した政治家。99年には、手術中、突然発作を起こし再起不能といわれたものの、不死鳥のように再び舞台に戻ってきた男。それでも彼はコルシカ分権法案に反対し、モットーに従って再度辞任した。そして今回大統領戦に出馬するという。訪仏すればシュヴェンヌマンは、シラクとジョスパンの巨頭を除けば唯一、2桁台の支持率を獲得し、（フランス大統領選挙では通例の存在でもあるのだが）「第三の男」としてマスコミを連日賑わしていた。

私が個人としてのシュヴェンヌマンに興味を持ったのは、その人物的な魅力に加えて、93年の社会党からの離脱と新党結成は、フランス政党システムに「ヨーロッパ化」が生じているという仮説を立証しているものではないかという問題意識があったからである。つまり、欧州統合という 이슈がフランスの政党システムに負荷をかけ、これがシステム内に統合派と主権主義者という形でのクリーヴィッジを生じさせつつあるのではないかと考えたのである。この仮説を立証するために今回資料収集とインタビューを行い、修士

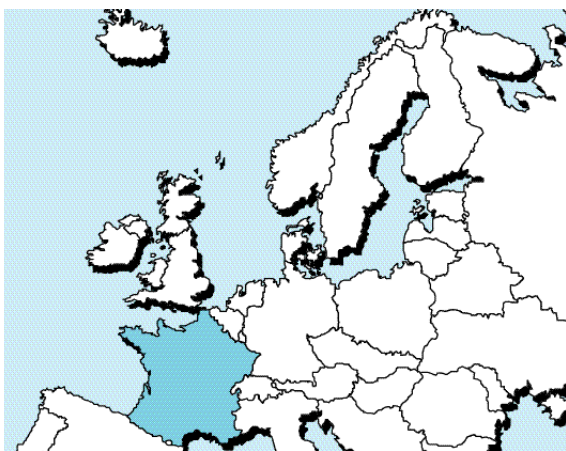
論文に反映させるのが狙いであった。

渡仏が今の今になってしまったのは、8月は未だバカンスであり、9月には国立図書館の休みが入り、論文の執筆に追われ、10月の段階ではまだ研究者のアポイントがとれないという状況が生じたためだった。当然、MDCや社会党にもアポを入れてあったのだが、待てど暮らせども返事が来ない。一緒に送ったクエスチョナーの内容があまりにも嫌味だったのかしらん？と思いつつも、フランスでは当然のこと、最後にはこちらから国際電話を入れて督促をかける始末だった。これ以上先に延ばすと自分の首を閉めることになる、しかし11月中旬にどうしても外せない研究会があり、結果として約2週間の滞在となった。

今回の目的は、1に資料収集、2に資料収集、3にインタビュー、4、5がなく最後に2年間滞りし結婚式を挙げたパリでのセンチメンタル・ジャーニーである。

資料収集は、主としてフランソワ・ミッテラン国立図書館（BNF）とシアンスポ（パリ政治学院）、そして社会党関連資料収集を同党付属の資料館で行うこととなった。また、デファンス地区にあるEU資料センター（Sources d'Europe）には、EUの個別政策に関する専門資料室があり、参考になった。

BNFに向くのは初めてではないが、今回もその巨大さに圧倒され、その近代的な趣にはたじろぐばかりである。ベンヤミンに憧れて、1区にある旧国立図書館の図書館証も作ってはみたものの、利便性の点からいえばミッテランの勝ち、である。ちなみにこの建物、L字型の塔が四隅に配置されているのが特徴なのだが、このL字の塔はページの開かれた本を現しているそう。もっとも、それらの配置が意味するところは、実は内容の巨大な“無”なのだ、物の本で読んだことがある。これがフランスのエスプリ？建築家の名は知らぬが、ポストモダン建築であることは間違いがなさそう。地階にある研究用スペースに降りると、そこはもはやSF映画「ガダカ」（A.ニコル監督、1997年）の世界で、銀色の壁に赤絨毯が敷き詰められ、どこかの国の国立図書館とは大違いだ。もっとも、すべてコンピュータ制御されてはいても、所詮それを扱うのは人間である。



やはりフランス人とデジタルは根本的に性に合わないのではないかと思われ知らされることも度々あった。

アポをお願いした研究者の方々は、何れも快く面会に応じていただいた。今回、インタビューをお願いしたのはフランス政党政治・政治史が専門のシアンスポのサドゥン教授(Prof.Sadoun) 同学院の研究所CERI(国際調査研究センター)のEU研究の第一人者、ルケンヌ教授(Prof.Lequesne)そして幅広い形でフランス政治史を専門とするEHESS(社会科学高等学院)のプロシャソン教授(Prof.Prochasson)である。特にルケンヌ教授の名著「パリ・ブラッセル：フランスの欧州政策はいかに形成されるかParis-Bruxelles:Comment se fait la politique europeene de la France」は豊富なケース・スタディと約160人も政策担当者へのインタビューを通じて構成されている画期的な研究書で、以前からお話を伺いたいと考えていた1人であった。同氏は、「テロ関係で忙しいのだが」と言いつつも丁寧に応じてくださり、日本で客員教授の経験があるため日本のEU研究動向にも関心を示されておられた。氏は、フランスでのある種アルカイックな欧州像と政治家のディスクールにうんざりされているようで、政党が92年のマーストリヒト条約批准の騒動以降、正面から欧州統合の問題に取り組まないことに不満のようであった。また、一国政治と欧州統合を結びつける研究アプローチのあり方についてもアドヴァイスをいただくことができた。

次に面会したEHESSのプロシャソン教授は「秘書がいなくて忙しいのだが」と学生の対応に追われていた。服装もネルチェックシャツにチノパンというラフな格好でルケンヌ教授とは極めて対象的だった。教授は以前C.E.R.E.Sに属していたこともあり、私の問題関心に深く賛同してくれたようで、C.E.R.E.Sの具体的なイデオロギー分析、社会党のヨーロッパ像などをフランス政治史の専門家として、また一人の元ミリタンとして明確な位置付けを行ってくれた。また、右と左というクリーヴィッジのあり様が変化しつつあるのではないかと、という私の問題意識にも賛同して下さり、自身がテーマとするところでもあり、いくつかの見解を述べてくださった。

フランス研究をする日本人はもはや珍しくもないだろうが、東洋から来る青年が何故シュヴェンヌマンとMDCなどに興味を持ったのか、と興味津々だったようだ。最後に、社会主義、共和主義、欧州統合という三角関係は、外国人のほうがよく見えるだろう、とアドヴァイスしてくれた。

他方、サドゥン教授は、葉巻を燻らせながら「ところでフランス語はどこで習ったのかね」と茶々を入れられつつ、政党システム内での欧州統合をめぐる争点は左右というクリーヴィッジをむしろ補強するものだとした。大統領任期短縮に話が及ぶと、第五共和制の制度的安定が深刻な形で危機に曝される可能性があるかと憂いておられた。同時に、最近のフランス政治の変化として、「強制的なコンセンサス化consensualization oblige」という現象を指摘し、民主主義の基本となる左右による政治的機能が働いていないことに危惧を抱くとも述べられた。

フランス社会党については、同党組織下にあるジャン・ジョレス財団(Fondation Jean-Jaures)の国際協力部長、クヴァル(Axel Queval)氏に会うことができた。日本からメールをやり取りして「はじめまして」といきなり日本語の文面が送られてきたので面食らったが、聞けばラング・ゾー(東洋言語文化学院)で8年間日本語を学んだのだという。氏の本欄には『日本社会党50年史』が誇らしげに置いてあった。当日は、現在財団に籍を置いており、バール首相以来の経済通と評価されるストロス＝カーン元経済・財政・産業相に紹介されるという思わぬ“収穫”にも恵まれた。

モンバルナス墓地でレイモン・アロンの墓参りを済ませた翌日、以前の滞在時にもお世話になったシアンスポの“日本人留学生の父”、デュブレイユ先生(Prof.Dubreuil)と再会を果たした。かつてフランス国民議会に引率いただき、フランス政治に蒙を開いてくださった方である。頭にあるはずの毛を顎に全て持ってきたという風貌も相変わらずで、人懐こい笑みを浮かべながら私の質問に丁寧に答えてくださった。開口一番「それで君はいつパリに留学するのかね」と尋ねられ、答えに窮ってしまった。専門は19世紀の歴史ということだが(いかんせん私は授業をと

ったことがなかった)、8カ国語を操り、自宅の書斎にはトゥクヴィルからケインズまで、数々の巨人達の肖像画を飾る氏は、欧州知識人の典型に漏れず話題が幅広く、同時にフォーコーブルデュモ嫌いな典型的なエスタブリッシュメントでもある。先般の地方選挙でシャルトル市(Chartres、同市の大聖堂は世界文化遺産にも登録されていることで有名)の助役に選出されたという。デュブレイユ先生は、John Laughlandの新著The Tainted Sourceの仏訳を引いてナチス・ドイツの「ヨーロッパを統合しよう」というスローガンが掲げられた写真を見せつつ、現在の欧州統合は、ドイツの帝国主義に荷担しているものに過ぎないと断罪した。そしてシュヴェンヌマンを始めとした主権主義者は明治維新期の薩摩藩のようなものであるとし、また、欧州統合は政治だけでなく、教会内部にも亀裂を生じさせていると証言した。「それでは『欧州統合は国民国家をむしろ強化する』というミルワード流のテーゼはどう評価するのか」と尋ねると「そのテーゼが有効だったのは90年代に入るまでのこと」と、統合の性格がここ10数年で変化したと答えた。山高帽をかぶり直しながら「トオル、非常に面白いテーマだが、たくさん読まなければならないぞ」と最後に叱咤激励され、颯爽と去られていった。

パリ駐在12年の産経新聞パリ支局長山口昌子女史との再会も大変嬉しかった。新聞を読むのが趣味だった高校生の頃、パリ発の記事でもっとも的確で本質を鋭く捉えているのは山口さんの書く記事と感じ、前回のパリ滞在の際に思い切って連絡をとってみたところ、快く応じていただいたのだった。女史は近著(『大国フランスの不思議』)で読者にずっと伝えようとしていたのは「ロマンスに満ち溢れた『フランス』」などではなく「試行錯誤の結果辿り着いた『フランス共和国』」であり、「私が恋しているのは後者だ」と述べておられる。この「恋心」がおそらく私のそれと重ね合わさったからこそ、山口さんの記事は私に訴えかけるものがあったのだと今にして思う。

色恋沙汰の常であるとはいえ、山口さんの「恋人」もヨーロッパに心奪われ、アイデンティティー・ロストに苦しんでいる。国家と社会(脳と体?)

を媒介する機能を担う政党が、この恋愛をどう成就させていくのかを見守っていきたく思っている。

最後に、助成金交付を許可いただいたDESK運営委員会の先生方、親切に対応していただいた研究室の方々、およびパリ滞在中にお世話になった長友貴樹氏、永松康博氏、そして素晴らしい時間を与えてくれた田熊“ぬう・にい”夫妻に記して感謝申し上げます。
吉田 徹（大学院総合文化研究科
国際社会科学専攻修士課程）



イギリスにおける資料収集

9月17日から10月2日までイギリスに滞在しました。滞在の主な目的はローマ時代のエジプトに関する修士論文作成のための史資料の収集と研究を進めることでしたが、海外の研究機関を訪れるのは初めてだったので、それらの利用の仕方を知るといのも目的の一つにありました。作業は主にロンドン大学高等研究院（school of advanced study）の古典学研究所（Institute of Classical Studies; <http://www.sas.ac.uk/icls/>）で行いました。この機関は大英博物館の裏のロンドン大学セネトハウス4階にあり、同階と地階が研究所の図書館となっています。利用するにはSociety of the Promotion of Roman Studiesあるいは Hellenic Studiesの会員にな

る必要があります。会員はイギリス国内にいる限り本を借り出すこともできます。

図書館にはギリシア・ローマの哲学・文学・史学に関する史料、研究書、学術雑誌が豊富かつ整理されて所蔵されており、日本では考えられないほど効率よく作業が進められます。東京大学の場合、西洋古代史関係の文献は総合図書館、教養学部8号館図書館、古典語教室、歴史学教室、文学部2号館図書館、3号館図書館、西洋史研究室、西洋古典学研究室、法学部図書館に所蔵されており、学内の蔵書であっても現物を手にするまでにかかなりの手間がかかりますし、学外に出向いたり複写依頼したりすることもしばしばです。それでも国内にない文献は数多いという現状に比べて、古典学研究所では目を通したい文献を手近な端末で検索し、書架から持ってくるだけの手間ですみます。全館開架で書籍は各テーマまたは対象地域ごとに分類されているので思いも寄らない重要な文献を知ることできます。私の今回の滞りの主な目的であるパピルス文書の収集については所在の確認自体は半日足らずで終わり、必要なパピルス40枚ほどのうち手に入らなかったものは1枚だけという大きな成果が得られました。また日本では存在を知らなかった重要な史料も発見できました。

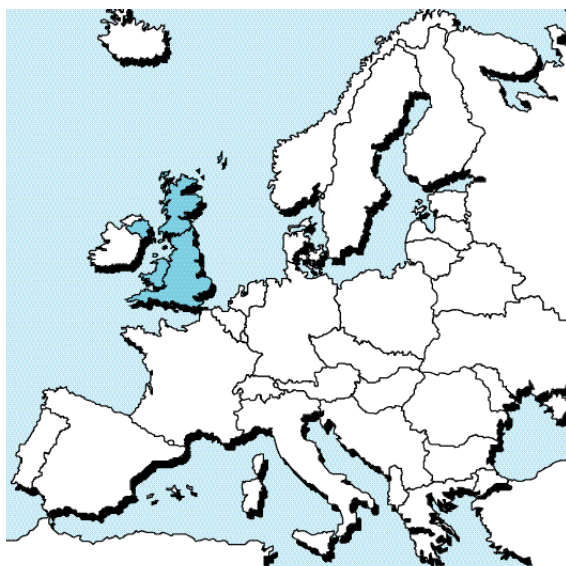
日本の図書館と比較して気付いたことを2, 3挙げるならば、まず読書机

にはノートパソコンの使用を想定して電源とモデムポートが、1つの座席に1つずつ用意されていること。そして利用者の半数以上がノートパソコンを使用していたことには驚きました。コピーについては旧式のコピー機が一台あるだけで不便を感じました。現地の利用者は図版を数枚コピーする程度なのでさほど混みあうこともありませんが、大量にコピーをとりたい場合には人を待たせてしまうので、何回か小分けにしてコピーをとらざるをえませんでした。

古典学研究所の他に高等研究院には短期滞任者が簡単に利用できる施設としてWarburg Instituteの図書館があります。人文学の分野では宗教・美術関係の蔵書に優れているこの図書館でもほとんどの図書が開架式書架にあるので自由に手に取ることができます。借り出すことはできず、コピーを取る際にもカウンターでチェックを受けなければならない点で古典学研究所より不便かも知れませんが、大学院生以上の研究者にはロンドン滞在中有効の利用証を無料で発行してくれます。こちらの図書館は手続きはしたもののほとんど利用しませんでした。どちらの図書館についても蔵書検索は高等研究院蔵書検索（<http://lib.sas.ac.uk/>）が可能です。

9月22日にはオックスフォードを訪れ、イギリス国内で最も古典学関係の書籍が充実しているといわれる書店Blackwell'sで書籍を購入しました。翌週末にはケンブリッジに行くことを計画していましたが、4月に来日し、東大でも公演を行ったケンブリッジ大学のピーター・ガンジ先生に面談を申し込んだところ10月1日なら可能との返事をいただいたので、予定を変更し、自分の研究についてのエッセー作成を図書館での作業と並行して進めました。

10月1日にはケンブリッジ大学を訪れ、ピーター・ガンジ先生にエッセーを読んでいただき、問題点、考察を深めるべき点についてアドバイスをいただきました。その後、ケンブリッジ大学古典学科の図書館および博物館を見学しました。図書館はロンドンの古典学研究所ほどではありませんが充実した蔵書を誇っていました。博物館にはギリシア・ローマ時代の有名なモ



ニュメントの模造が展示されており、模造品といえども学生にイメージを喚起させるという意味での教育効果はあるように思えました。

最後になりましたがイギリス滞在の諸事にわたり小堀馨子さん（東京大学大学院人文社会系研究科/ロンドン大学歴史学科） 加えてケンブリッジ訪問の際には池口守さん（東京大学大学院人文社会系研究科/ケンブリッジ大学古典学科）にお世話になりました。お二方からもイギリスにおける古典学の教育・研究システムなどについて教えていただくことが多々ありました。記して感謝申し上げます。

なお、ロンドン大学古典学研究所で利用・複写した文献は以下の通りである。

パピルス（略記はCHECKLIST OF EDITIONS OF GREEK, LATIN, DEMOTIC AND COPTIC PAPYRI, OSTRACA AND TABLETSによる）
 CPR 26 P.Amh. II 74; 75
 P.Berl.Leihg. I 17 P.Bon. I 18 Col.i
 P.Bru. I 5; I 10
 P.Corn. 16.1-13; 16.21-38; 16.39-58
 P.Fay. 319,20-26 P.Flor. III 301
 P.Lond. II 182b; II 299; II 476a
 P.Giessen 19 P.Kron. 1-69
 P.Mich. 214; 262
 P.Mil. Vogl. 80-87; 89 90-95; 155-174
 176-180; 182-183; 198; 224-227
 P.Par 18 P.Ryl. II 111
 PSI XII 1227; IX 1062; X 1115
 P.Tebt. II 284; II 290; II 320; II 322; II 379; II 416; II 480; II 504

研究文献・論文

- ・ R.Alston, Houses and households in Roman Egypt, in: R.Laurence and A.Wallace-Hadrill (eds.), Domestic Space in the Roman World: Pompeii and Beyond, Portsmouth, 1997, pp.25-39.
- ・ R.S.Bagnall, B.W.Frier, I.C.Rutherford, The Census Register P.Oxy. 984: The Reverse of Pinder's Paeans, Bruxelles, 1997.
- ・ R. Dutton, Five Census Returns in the Beinecke Library, BASP 34 1997, 53-78.
- ・ Gagos, T., L.Koenen, McNellan, B.E.,

A First Century Archive from Oxyrhynchus: or Oxyrhynchite Loan Contracts and Egyptian Marriage, in: J.H.Johnson,(ed.), Life in a multi-cultural society : Egypt from Cambyses to Constantine and beyond, Chicago, 1992, pp.184-202.

・ D.Hobson, Role of Women in the Economic Life of Roman Egypt, Echos du Monde classique, 28(N.S.3) 1984, pp.373-390.

・ N.Lewis, On Peternal Authority in Roman Egypt, RIDA 17(1970) 251-258

高橋亮介（大学院総合文化研究科

地域文化研究専攻修士課程）



ドイツ近世神智学研究のための一次および二次文献資料の収集

1. 総括

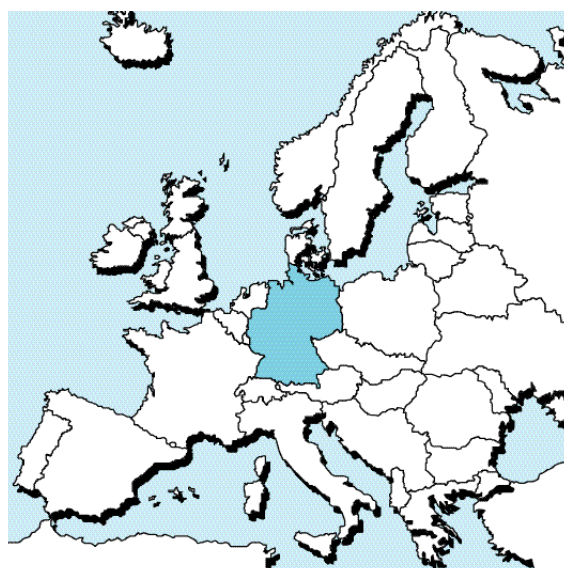
博士論文執筆のため日本国内において入手不可能または困難であるJacob Bohme (1575-1624) に関連した16,17世紀の神智学的傾向をもつ一次文献資料、ならびに主に学術雑誌・論文集に掲載された二次文献資料の収集を第一の目的として、2001年9月11日より30日までドイツに滞在した。丁度ドイツへ到着した日にアメリカで同時多発テロ事件が起こり、(当初は特に)緊迫した雰囲気の中での滞在となった。しかし、幸い事故もなく、文献収集のほか

に、ペーメをはじめとして近世以降の神秘思想・神智学の研究をされている研究者にも直接お会いして御教示いただくことができ、更にペーメが生涯の大半を過ごした地Gorlitzを訪ねべ - メと神智学に強い関心がもたれた時代的文化的背景への理解を深める機会にも恵まれて、当初の渡独の目的を果たすことができた。今回のドイツでの滞在・文献収集のために助成金を支給して下さいましたDESK(ドイツ・ヨーロッパ研究室)の関係者の方々に、心よりお礼を申し上げます。以下、訪問した順序にしたがって、報告する。

2. 訪問した図書館

1) Herzog August Bibliothek
 Wolfenbuetel
 所在地 Lessingplatz 1 38304
 Wolfenbuetel

本図書館は、15世紀から18世紀まで歴代の公爵の居住都市であったWolfenbuetelの街の中心部にある。1550年頃に当時Wolfenbuetelを統治していたユリウス公が本の収集を始めたことが契機となって創立され、1644年にアウグスト公の多数の蔵書が寄贈されるなどして発展を遂げてきた。1690年から1716年まではライプニッツが、また1770年から1781年まではレッシングが図書館長を務めたことでも知られる。第二次世界大戦後は、ドイツにおける主にルネサンス期からバロック期に至る研究と学術交流の中心地として重要な役割を担



ってきた。図書館の建物はBibliotheca AugustaとZeughausに分かれる。前者の閲覧室においては16-19世紀の写本、古文書などが閲覧できる。また、博物館部門が併設されていて、そこでは書架に置かれている当図書館所蔵の古書を見学することができ、落札した当時世界で最も高価な本といわれたEvangeliar Heinrichs des Lowenの原本も毎年6週間だけ公開される。後者のZeughausには、約10万冊の研究書、学術雑誌、辞書類等が所蔵されている。その他に、同じ敷地内において図書館長だったレッシングが1777年から1781年に死ぬまで住んでいた家を修復したLessinghausが博物館として一般に公開されている。

筆者はドイツへ到着した翌日の9月12日から24日まで、閉館日を除いて同図書館に通った。主に、Bibliotheca Augustaにおいて、16-17世紀のヘルメス学、カバラ、神智学関係の文献を閲覧した。あらかじめ日本でインターネットによって検索しておいた文献資料のリストをもとに本の請求番号を所定の用紙に記入して提出すると、書棚から司書の方が本を出して来て下さる。閲覧室には、常時5人程の研究者、大学院生などが来ていて全員ノートパソコンを持ち込んで閲覧した文献の必要な箇所をコンピューターに入力していた。古文書の閲覧なので鉛筆以外の筆記用具の持ち込みや個人でコピーすることは許されない。その代わり文献のマイクロフィルム複写やコピーサービスがあり、申請すれば約1カ月後にドイツ国外でも自宅まで郵送してもらえる。但し、文献によっては保存のためこのサービスの対象外となるものもある。時間の関係上今回筆者はこのシステムを利用したが、申請する時点で必ず複写してもらえるかどうかかわからないために、自分のコンピューターに入力していくのが一般的な研究スタイルのようだった。全般的に日本からの閲覧者は少ないようで、滞在中日本人に会うことはなかった。短期間に20冊以上の書物を閲覧する結果になったので、他の閲覧者に比べて司書の方々にお手数をおかけしたが、皆さん親切に対応して下さった。もっと長期間滞在して文献の閲覧ができれば理想的ではあるが、限られた時間の中で日本では閲覧不可能な文献を閲覧し必要に応じて文献複写の依頼をしてきたので、Bibliotheca

Augustaでやるべきことは果たせたとと思う。(帰国後、図書館から申請したうち3件のみコピー不可の通知があった。テロ事件に関して郵便物のチェックが厳しくなり文献が届くまでにはなお時間がかかりそうである。)

また、Zeughausには、筆者が予想していた以上に研究書や学術雑誌がそろっており、最上階にある閲覧室はいつも20人近い閲覧者でいっぱいだった。神智学関係の二次文献をOPACで検索し、借り出してコピーすることもスムーズにできた。その上、日本で訪問の許諾をいただいておりますBerlinにお訪ねするつもりでいた自由大学のSchmidt-Biggemann教授がご自身のお仕事で筆者の滞在中Wolfenbittelへおいでになられ、わざわざBerlinまで来るに及ばずとおっしゃって下さって、当地で教授にお会いすることになった。この事からも、本図書館の研究機関としての重要性を実感した。教授はお忙しい中、18日の昼時間をとって下さった。1998年に出版されたご著書の『Philosophia perennis Historische Umriss abendlandischer Spiritualitat in Antike, Mittelalter und Fruher Neuzeit』を中心に会話が交わされ、その中で論じられているベーメの「7性質」などに関してこちらの拙い質問に答えて詳しく御説明下さった。教授は、ベーメの神智学をヨーロッパの霊性史の中にいかに位置づけることができるか、ベーメの思想がどこから来ているといえるかに強い関心がおありのようで、「Muster」という語が何度もお話の中に出て来たことや、教授の博覧強記の縦横無尽にお話の中に織り込まれる知識の豊富さが特に強く印象に残った。博士論文のテーマに関してアドバイスして下さり、大変有意義な会見となった。その



他、図書館の方の呼びかけでアメリカでのテロ発生後の2日後の13日午前10時にBibliotheca Augustaにいた閲覧者、見学者、職員の全員が図書館の前に集まって、テロの犠牲者のために黙祷を捧げた。テロ事件について言及された方は一様に、報復攻撃によって新たな犠牲者が出ることを懸念し、アメリカに冷静な対応を求めている。

2) Oberlausitzische Bibliothek der Wissenschaften

所在地 Neissstr.30 02826 Górlitz

本図書館については、事前に日本ではJ.G.Milich(1678-1726)の個人蔵書を基に設立された16-19世紀の文献を中心に約12万冊の書籍を所有する図書館であること以上の情報は入手できていなかった。図書館は、Kulturhistorisches Museum Górlitzの建物の中にあり、筆者は9月26日、27日の2日間のゲルリッツ滞在中、26日に博物館の見学とあわせて図書館を訪れた。OPACによる検索システムがまだ導入されておらず、書庫の横の閲覧室でカード目録で調べて閲覧を希望すると司書の方がその本を取って来て下さり、必要に応じてその場で文献のコピーができる。ここで、2001年1月に当地に設立されたというInternationales Jacob Bohme Institutについて尋ねてみたが、あいにく担当者が休暇中だったため詳しい情報は得られなかった。だが、職員の方々は大変親切に手助けして下さいました。ベーメの自筆原稿と初期の写本に関する目録をここで購入できた。博物館には、ベーメに関する展示コーナーが特設されていた。彼の生涯が年代順に著作からの引用を交えつつ紹介され、当時のゲルリッツの社会状況やベーメの交友関係(支援者と敵対者)に着目したコメントなどもあった。15世紀後半ゲルリッツには千年王国説の信奉者、カバリスト、錬金術師、パラケルス主義者などが多数集まっていたようで、宗教的にも比較的寛容な雰囲気があり、それがベーメの神智学が生まれる思想的土壌となったという指摘は興味深かった。

図書館を訪問したほかには2時間かけての市中心部のガイドツアーに参加したり、個人でベーメゆかりの場所を散策した。ゲルリッツはナイセ川をはさんでポーランドとの国境に位置する



ベルリンとミュンヘンにおける資料収集

1. 研究助成の目的および実施要領

今回DESKの研究助成を受けた目的は、博士論文完成のため必要な資料の入手にあった。博士論文は「帝政期ドイツにおける名誉職救貧行政 ミュンヘンを中心に」であり、19世紀後半から20世紀初頭にかけての都市救貧政策を舞台に、都市市民層の自己意識と統合のあり方を検証する。私は1997年9月から2000年4月までDAAD奨学生としてジーゲンおよびミュンヘンに滞在し研究の深化と資料の収集に努めたが、今回帰国後の執筆の過程でさらに文献を参照することが必要になったため、DESKの研究助成金の交付を申請した。

この目的を達成するべく、本年9月10日より10月2日にかけて、ベルリンおよびミュンヘンにおいて研究調査をおこなった。利用した施設は、ベルリンにおいてはベルリン州立図書館（プロイセン文化財）Staatsbibliothek zu Berlin, Preußischer Kulturbesitz, Haus Unter den Linden (SBBPK)、ミュンヘンにおいてはバイエルン州立図書館 Bayerische Staatsbibliothek (BSB)である。

2. ベルリンにおける研究

ベルリンには9月16日より20日まで

滞在した。かつてのプロイセン宮廷図書館を基礎とする州立図書館は膨大な蔵書を有しており、みじかい滞在とて時間が限られていたため、利用した資料は

Zeitschrift für das Armenwesen, Organ der Zentralstelle für Armenpflege und Wohltätigkeit und des Deutschen Vereins für Armenpflege und Wohltätigkeit. Berlin 1900ff.

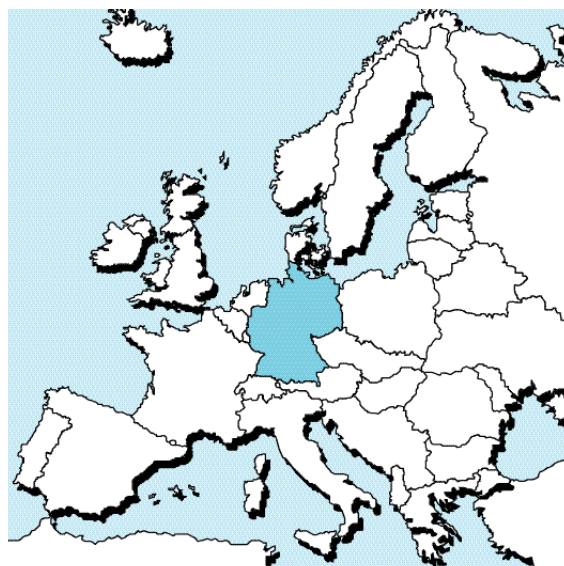
のみである。この雑誌は1900年から公開されているが、そのうち1903年から1914年までの分を閲覧した。当初の3年分はいかなる理由によってかは不明であるが、度々注文したにも関わらず、ついに借りだすことができなかった。

ドイツ第二帝政期にあつては、1890年頃より都市における急速な人口の集中と工業化がもたらす様々な問題状況が深刻化し、それに応じて都市の行政に参加する専門官僚や名誉職としてこれに連なる市民層の関心も高まりを見せ、さまざまな都市社会政策が展開された。そのような問題の深刻化を縦糸とし、都市市民層による対応を横糸とするせめぎ合いの中から現在の福祉国家に直接連なるような近代都市システムが形成されていったのである。これについては近年ドイツの各都市のケーススタディが数多く発表されている。

そうした社会問題とそれに対する対応策の中で最も重要なものが下層民対策である。とくに下層民の中でも最も

街であり、対岸の様子も肉眼でよく見えた。ペーメが住んだことのある家がポーランド側のナイセ川沿いにある、家屋全体がベニキで真っ赤に塗られていたのには驚いた。ドイツ側からも、どの建物がペーメの家なのかすぐわかるようにとの配慮らしいが。それにしても、ヨーロッパ大陸の東西を結ぶ交通の要衝に位置し、中世末期にすでに商業都市として繁栄していたというゲルリッツは、想像していたよりも遙かに大きく歴史の重みを感じさせる街だった。Schwarze Strasse と呼ばれる路地にはかつて錬金術師たちが住んでいたとか、このバルコニーからナポレオンがロシア遠征に向かうフランス軍兵士たちに演説をしたのだといった説明をガイドの方から聞いた。また、至る所で建物の修復作業や道路工事が行われており、新しくカラフルに衣替えをした家屋と石炭によって黒く煤け崩れ落ちそうなままの建物とが混在していて、統一後の時の流れを目の当りにしているかのように感じた。失業率が高く若年層を中心に西側の地域への人口の流出が続いているとのことで、部屋貸しの広告も目についた。最後にゲルリッツを去る日に、Nikolaifriedhof に赴いてペーメの墓に参り、同じ敷地内にあるNikolaikircheにおける常設のペーメ展を見学した。ここでは、ペーメの著作からの短い引用とその引用句からインスピレーションを得て制作された抽象画等の美術作品がセットで展示されていた。この教会は現在ミサには使われておらず、小規模の催しが開かれる場になっているとのことだったが、ペーメ展はすでに2年近く続いていてペーメと現代美術の組み合わせという趣向に彼の作品受容の多様な広がりを感じた。文献収集とともに、ゲルリッツの歴史やペーメの足跡に多角的に触れられたことは貴重な体験となった。その後、カッセルに短時間立ち寄って、30日に帰国の途についた。今回の滞在では、ヴォルフエンヴェッテルで友人の紹介でホームステイすることができ暖かく迎えていただいた。最後に様々な面で助けて下さった方々の御顔を思い浮かべながら、記して感謝の意を表したい。

中山みどり（大学院総合文化研究科
超域（比較文学比較文化）博士課程）



貧しい、失業や疾病などの理由によって自力で生活を行うことが不可能になった貧民Armenへの救済を目標とする救貧政策Armenpolitik, Armenwesenは、各都市において中世以来の伝統を持っており、都市社会政策の様々な事業や分野の多くがこれを中心にして構築されていった。この救貧政策を議論するためのドイツ全国レベルのフォーラムとして1890年に結成されたのがドイツ公的救貧民間福祉協会 (Deutscher Verein für öffentliche Armenpflege und private Wohltätigkeit、以下DVと略称する)であった。また、協会の常設の情報収集・仲介機関としてベルリンに設けられたのが、救貧福祉センター-Zentralstelle für Armenpflege und Wohltätigkeitである。今回利用したこのZeitschrift für das Armenwesenは、副題に示されたとおりこの両組織の月刊機関誌である。発行者のエミール・ミュンスターベルクEmil Munsterbergは、ハンブルクとベルリンで市の責任者として救貧制度を担当したスペシャリストであった。

このように重要な資料であるが、日本においては一冊も見つけることはできなかった。当時の日本がドイツにおける刊行物をかなり輸入していたことを考えるとこれはむしろ不思議である。また、2000年4月までのDAAD奨学生としての留学における主たる滞在先であったミュンヘンに所蔵されていたものは、第2次世界大戦中の空襲により焼失してしまったのである。

3. ミュンヘンにおける研究

ミュンヘンにおいては、9月10日に到着して以来数日かけて必要な資料の注文などの作業を行い、ベルリン滞在をはさんで9月21日より10月2日までかけて閲覧とコピーを行った。ここで参照したのは、

- a. Verhandlungen der Kammer der Abgeordneten des bayerischen Landtages, insbesondere Verhandlungen des besonderen Ausschusses für Gesetze für Gemeinwesen, Ansässigmachung, Armenwesen und Gewerbeswesen. 2Bde. München 1867-69
- b. Mitteilungen des Statistischen Amtes der Haupt- und Residenzstadt München. Münchener

Jahresübersichten. München 1887ff.
c. その他、同時代文献、研究書などである。

aは、バイエルン下院における議事録である。1866年の普墺戦争敗戦後、バイエルン政府は多くの内政改革を断行することを迫られたが、その最大の眼目が、いわゆる社会立法Sozialgesetzgebungと呼ばれる、救貧制度、本籍制度、都市自治制度の改正であった。バイエルン王国に営業の自由、移転の自由、そして地方自治が導入されたのは、このときが初めてであった。このとき定められた制度は、何度かの改訂を経て基本的にワイマール時代に至るまで保持される。

この法案成立時の議会審議の経緯については、幾つかの研究論文がすでに出ているがいずれも古く、十分なものではない。とくに私の博士論文における議論において、都市にどの程度自治を認め、国家との関係をいかに定義するか、またその都市に全面的に移管される救貧行政をどのように組織するか、また市民たるの要件を定める本籍権と市民権をどのように決定するか、は最重要の論点であり、したがって各法案について3回の読会を含むすべての委員会審議の全容を掲載したこの議事録は大変貴重なものであった。

bは、ミュンヘンの市統計局が毎年発行していた統計資料集である。人口や予算といった一般的な事柄だけでなく、気象天候や食料価格にいたるまでが満載されており、さらに数年に一度の定期的に行われる失業や住宅事情の調査などは、都市史の研究に書くことのできない基礎的なデータを提供してくれる。今回はとくに1904年から07年にかけて行われた大規模な住宅調査の報告集を入手できたのが成果であった。

cは、これまでのドイツ留学においても、また日本においても入手不可能だった同時代文献および研究書である。なかでもドイツ女性運動のリーダーの一人であり、前述のZeitschrift für das Armenwesenでも健筆をふるったアリス・ザロモンAlice Salomonの著作集を発見できた。彼女は世紀転換期頃から市民層の家父的社會秩序を社会政策の面でも揺り動かしていく女性社会事業の先駆者である。また、ミュンスターベルク等とともにDVの活動を支えた社会改革運動家のヴィクトー

ル・ベームルトViktor Bohmertの記念論文集をも入手できた。これは東大医学部所蔵のものが行方不明になっていたため、これまで入手できなかったものである。

このように成果はあったが、しかしそれでもなおかつ、他に貸し出されたり、あるいは修理のため製本に出されていたりで利用できなかった文献が若干あった。短期の資料調査には不可避の事態とはいえ残念である。

4. 雑感 むすびにかえて

今回のDESK助成金による滞在によって印象づけられた点を2,3列記して報告のむすびとしたい。今回ことに印象的であったのは、図書館利用という研究環境の日独における相違である。利用した2つの州立図書館とも、最新の技術を積極的に導入して利用者の便宜をはかり、利用環境を改善すべく不断の努力を行っていた。1.ベルリンは図書館の建物自体が改装の最中であり、それもただ修理するだけでなくヴィルヘルム時代の威容を取り戻す復元の作業であった。ミュンヘンでは、2.オンラインの活用。検索と予約は言うまでもなく、貸し出し延長、料金の支払いまでも可能である。3.コピー。旧い文献であっても非接触型のカメラ・スキャナーによってセルフコピーが可能になり、それもハードコピーだけでなく、CD-ROMに焼くことができるため安価な上にかさばらない。また、手書き文書部門であっても閲覧だけでなくスキャナー・コピーの申し込みが可能であり、これは後日、10日ほどで日本まで郵送されてきた。またドイツでは一般的であるが、4.相互貸借。大学・州立図書館相互の貸借も州境を越えて可能である。現物貸借だけでなく、これらの図書館を結ぶメールやファックスによる文献複写サービスsubitoも新しく始まった。5.また便宜を図るだけでなく、図書館側も常に蔵書の補充に努めている。今回、戦災で失われたまま、2000年当時にはなかった資料が相当補充されていたのには驚かされた。

これらの利用事情を日本の一般的な図書館の利用事情と比べると、概嘆の声をもらさずにはおれない。いまだに大学院生であっても東京大学の所有する文献でさえ全面的に利用すること

はできず、部局によって各々制度が違う上に、煩瑣な手続きを経なければならぬ。他大学の文献は場合によっては取り寄せることさえできず、自分で取りに行かされたり、取り寄せたとしても図書館の外に持ち出すことすら許されない。著作権法上問題がなく、研究目的であっても図書館の内規によって全冊コピーが許されない場合もある。また、論文執筆中であっても貸出期間や冊数になんらの特典はなく、一般学生と変わらない。駒場の教養学部図書館の場合、貸出冊数はたったの3冊であるが、バイエルン州立図書館は50冊であり、内部の研究者用ブースを利用する場合は100冊である。これらの研究の生産性を著しく損なっている諸点については改善を強く望みたいところである。

さて、これはまったく偶然のことであるが、到着翌日にアメリカのニューヨークとワシントンにおけるテロ事件が発生した。ドイツではシュレーダー首相がただちに「無制限の連帯」を表明し、その夜は犠牲者を悼む人々がろうそくを点して街の広場を埋めた。表面的にはいつもと変わらぬ生活が続いていたが、人々は折に触れ受けた衝撃の大きさを隠し切れぬようであった。マスコミではこの事件をきっかけに真の意味で21世紀が始まった、とする意見など、興味深い議論も連日行われ、ヨーロッパ社会が今回の事件をどう捉え、それによってどう変わろうとして

いるのか、それを目の当たりに見ることができたのも、今回の滞在の成果のひとつであったと思う。

以上、比較的短いあいだの滞在であったが、いずれも垂涎の資料を閲覧することができ、その総りは大きかった。今後は迅速に博士論文完成を目指したい。最後に、いつも丁寧に質問に答え、かつ様々な便宜を図っていただいた各図書館の職員の方々に、そしてこの滞在を可能にしてくれたDESKに、心よりお礼を申し上げたい。

辻 英史（大学院総合文化研究科
地域文化研究専攻博士課程）



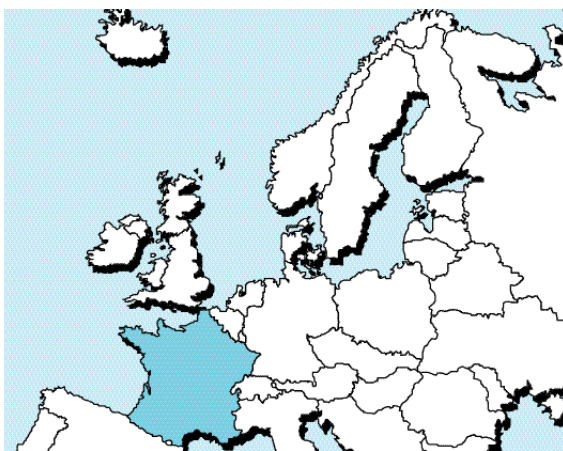
フランス・ヴィシーでの 語学研修

DESK助成金の公布を受け、フランス、ヴィシーのカヴィラム語学学校で9月2日から9月29日までの4週間の語学研修を修了しました。滞在形式はホームステイとし、フランス語の習得のみならず、フランスの生活習慣、日常の文化的差異を身をもって経験することができました。また期間中のアメリカの同時多発テロの影響はほとんどなく帰国に際しても目立った影響はありませんでした。

さて、受講した語学学校の語学研修プログラムの授業は、朝8時30分から2時間の昼休みをはさんで、夕方3時

30分まで行われ、午前と午後にそれぞれ異なった内容の授業がなされました。午前は文法を中心とした総合的なフランス語の習得を目指すもので、会話、読解、作文、聞き取りのための教材が取り扱われました。午後の授業では、学生が任意にクラスを選択するもので、会話の能力の向上を目指した授業を受講しました。それぞれの授業は学生の能力に応じたクラスわけがされましたが、私が所属したクラスではドイツ人を中心とした十三名ほどのクラスとなり、ほかにスイス人、イタリア人など様々な国籍の人々と交流することができました。

総合的学習を行う午前の授業では、条件法や接続法などの文法の解説が行われたあとに、簡単なプリントの教材が配られ、ひとりひとりに解答を求めるという形式でいねいに指導がされました。とりわけ文法での動詞の過去分詞形の性数一致や形容詞の副詞化の特別形、動詞の名詞化などこれまであまり重視していなかった細かな文法事項が扱われ、非常に有益な学習を行うことができました。また文法の他にフランスの新聞や雑誌の記事が取り上げられ、それを題材とする討論や意見を求められるなど自分の意見をフランス語にまとめる能力を養成できたと思います。聞き取りに関してはフランスのラジオニュースやビデオが用いられ、それらを聞きながら解説がされました。この聞き取りとりわけラジオのそれはもっとも難しいとされるもので、この教材を取り上げられることで、これからの学習をこうした聞き取りを目指す努力に向ける必要を身にしみて感じるようになりました。午後の授業では会話を中心とした授業が行われ、討論や発表を行うことが求められ、他の学生とともに共同でその準備をおこなうなど講義だけでなく、基本的なコミュニケーションをとる際の会話もフランス語で行うことで、会話の機会を十分に得ることができました。教材としてはビデオや写真、簡単な雑誌の記事、広告などの様々な教材を元にして自分の考えをまとめることが求められ、また、一方で相手の考えに対する意見を求められるなど、話すだけでなく相手の考えを、きれいなフランス語の撥音と言えないものであってもそれを理解することを求められました。こうした教材



を扱う他に、各々の国の文化について発表する機会もあり、日本の文化について発表を行う機会があり、日本の食文化についてフランス語で表現することに苦心したものの、他の学生が発表に聞き入ってくれ、多数の質問をしてくれるなど、学生の関心をひくことができました。また他の国々の学生の発表では、ドイツの犬の飼い主のその飼い犬に対する責任に関する法律の話題や韓国の国内事情など様々な国々の文化にフランス語を介して通じるという稀有な経験ができました。

こうして他の国籍の人々とともに学習することで文化的な差異をこえた交流を経験できたこともさることながら、これまでのフランス語の学習の姿勢を問い直される結果となりました。履修期間に関わらず世界の非フランス語圏の人々のフランス語の運用能力の高さに驚き、とりわけ会話の能力に関しては、とくに自分の意見を簡単なフランス語で即座にかつ十分な長さの表現ができることには驚きを禁じませんでした。読解を中心とした文法の習得から、聞き取りや会話などの実用的なフランス語の学習の努力を怠ってきたことを痛感し、こうした実用性を考慮しつつフランス語を習得する姿勢の教訓となりました。この経験をこれからのフランス語学習の糧としていきたいと思っております。

日常生活においては滞在形式をホームステイとしたために、フランスの文化や生活習慣を実際に経験することができました。ホームステイ先の夫妻には大変お世話になりヴィシーの繁華街を案内していただいたり、食生活の上での習慣の違いに気を使っていたりなど、生活に関する細かな配慮をいただき、充実した日々を送ることができました。とりわけ、食事に関しては毎日異なる夫妻の手作りの料理が夕食に出され、フランスの家庭料理を味わうことはこれまでにない貴重な経験となり、またホームステイ先の家族と食卓をともにすることで、実際のフランスの家庭における会話や雰囲気、文化を肌で感じることができました。ただ、ここでも日常生活において用いられる語彙の修得を怠ってきたことを痛感することになり、菓や鍋やチーズや窓の種類など日用品の名を夫妻に頻りに教示いただきました。またたどたどしい

私のフランス語ながら、熱心に私の話に聞き入って、分かりやすいフランス語で私と会話をされようとする夫妻の姿勢に助けられ、またこのように夫妻によって私のフランス語の運用能力が学校外でも鍛錬される機会を得たことは望外の幸せでもありました。

ヴィシーでのフランス語学研修を修了して、ある程度の進歩を得ることができたとの自負を抱きつつも、これからの学習の課題とその糧を得ることができ、これがさらに努力を惜しまずフランス語を修得することに向けての励みとなる経験を得ることができました。とりわけ実用性を心がけたフランス語の習得、また簡単な表現の鍛錬など今後の学習の課題を私なりに位置づけることができました。最後になりましたが、DESK関係者の方々にこの貴重な経験のためにご支援いただいたことに深く感謝いたします。

堤 裕策 (教養学部地域文化研究科
フランス分科三年)

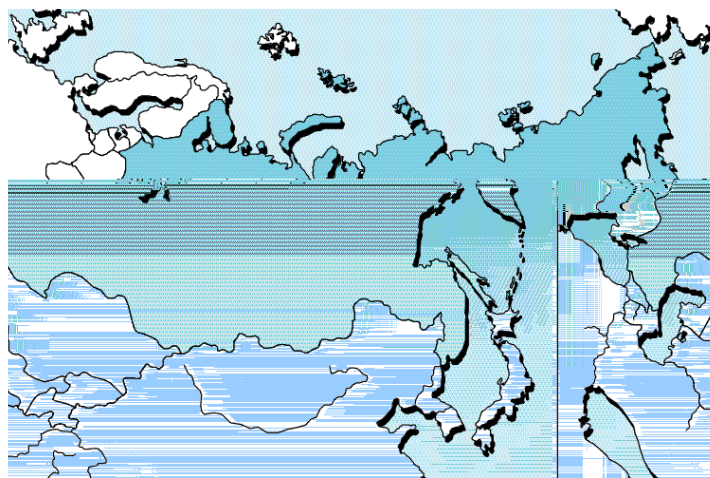


ロシア国立人文大学での ロシア語学研修 (2001年7月31日~2001年8月27日) を終えて

今回DESKの助成を受けて参加したロシア語学研修の主目的は、卒業論文の執筆に向けてロシア語能力を向上させることだった。卒業論文はロシア

語で書かれなければならないが、まだロシア語の学習を始めて2年しか経っていない私の語学力は、到底卒業論文を書くに足るものではなかったからである。1カ月という短い研修期間では、卒業論文を十分に書きこなせるロシア語能力を身につけたとは言いがたい。しかし、これは根拠となる証明が何もないのであくまで主観的な判断であるが、ロシア語能力を向上させるという当初の目的は確実に達成されたように思われる。

研修の1カ月間、私はモスクワにあるロシア国立人文大学の夏期ロシア語講座に参加した。授業は週に3日、1時間半の授業を週に9コマほど受講した。授業は少人数制で、最高でもクラスは5名の生徒に限られていた。授業内容は文法、会話、文学、実習などで、すべてロシア語で行われた。授業のレベルとしてはそれほど高度なものとは思われなかったが、それまでの2年間、日本では学習を実践に移す機会がほとんどなかった私にとって、ロシアで生活するうえで必要になる実用的な単語や言い回しに触れたことは十分に有益であった。何よりもすべてロシア語で行われる授業についていくことでロシア語に慣れることができ、これは帰国後の現在、出席しているロシア語の授業においても大いに実感している。また授業は教師からの一方的な説明ではなく、双方向的なものだったので、ロシア語で考え、言葉にする能力



も向上した。

当初はこのような通常のプログラムのみを受講していたが、卒業論文に向けた語学力の向上という目的に沿って、後半の2週間は週に2度の個人授業も受けた。この中で私はロシア語による論文の書き方の学習を希望したところ、実地的確な指導を受けることが出来た。論文の構成の仕方や有用な表現などを教わり、語彙力、読解力が向上した。

滞在中は一般のロシア人家庭にホームステイした。大学の寮という選択肢もありえたし、そちらのほうが経費はかからなかったのだが、日常生活の面でもロシア語の環境に身を置きたいという希望からホームステイを選んだ。一般のロシア人との生活は大学での研修と同じかむしろそれ以上にロシア語力の向上に貢献してくれたと思う。日常会話の能力が磨かれただけでなく、ホストファミリーの様々なアドバイスも勉強の大きな手助けとなった。また、ホストファミリーを通じて多くのロシア人と知り合うことで、ロシア人の精神風土の一端にも触れ、非常に興味深い経験になった。

授業のない日などはモスクワ市内の見学に充てた。モスクワは美術館、博物館や、長い歴史に培われた重要な建築物など、見るものには事欠かなかった。さらにバレエや演劇などの催しも充実している。こうした活動を通じて

DESK (ドイツ・ヨーロッパ研究室) 主催

21世紀「ヨーロッパ」の 理念：政治思想の未来

(2002年3月27日～4月2日)

講演者プロフィール

ロシアの芯q7h 探7X ム" VeQT ^ ufU Au)% pb`wa p sB ぐu 東京大学教養学部
創立50周年記念国際学術企画

Johannes Weib
カッセル大学教授 講演会

テーマ：

グローバル化社会における
宗教の役割

日時：

3月18日(月)
14:00 ~ 16:00

場所：

東京大学駒場キャンパス・教養学部
4階視聴覚ホール

講演はドイツ語で行われます
(日独 同時通訳つき)

PINA IN KOMABA
(駒場におけるピナバウシュ&ヴッ
パタール舞踊団によるレクチャー・
デモンストレーション企画)

日時：

2002年5月15日(水)午後4時半

場所：

東京大学教養学部内
文化活動施設(多目的ホール)
日本文化財団と共催

構成内容(予定)：

- 第1部 タンツテアーターの展開
(「7つの大罪」を中心に)
- 第2部 質疑
- 第3部 ヴッパタール舞踊団ダンサー
2、3名によるデモンスト
レーション



DESK事務室

開室日：月曜～金曜(祝日除く)

住所：〒153-8902 東京都目黒区

駒場3-8-1

東京大学大学院

総合文化研究科・教養学部

8号館1階109号室

Homepage:

<http://ask.c.u-tokyo.ac.jp/desk/>

E-mail:

desk@ask.c.u-tokyo.ac.jp

Telephone & Fax:

03-5454-6112